

## 亦稚貝塚における試掘調査（2018年）

柳澤清一<sup>1)</sup>・山谷文人<sup>2)</sup>・内山幸子<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> 〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町513 早稲田大学総合研究機構 先史考古学研究所

<sup>2)</sup> 〒097-0101 北海道利尻郡利尻富士町鷺泊字富士野 利尻富士町教育委員会

<sup>3)</sup> 〒005-8601 北海道札幌市南区南沢5-1-1-1 東海大学国際文化学部

## Prospecting Survey at the Matawakka Shell Mound in 2018

Seiichi YANAGISAWA<sup>1)</sup>, Fumito YAMAYA<sup>2)</sup> and Sachiko UCHIYAMA<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup>Institute of Japanese Prehistory, Comprehensive Research Organization of Waseda University, Nishi-waseda, Shinju-ku, Tokyo, 162-0041 Japan

<sup>2)</sup>Rishirifuji Town Board of Education, Oshidomari, Rishiri Is., Hokkaido, 097-0101 Japan

<sup>3)</sup>School of International Cultural Relations, Tokai University, Minamisawa, Minami-ku, Hokkaido, 005-8601 Japan

**Abstract.** The Matawakka shell mound is located on a sand bank that leads to Kutsugata Cape, Rishiri Island, and most of it is covered with residential areas. A prospecting survey in 2018, confirmed a good cultural layer at the western end of the shell mound distribution area. Despite the limited survey, various materials were obtained that were useful for a chronological study of the Rishiri Island Okhotsk culture.

### はじめに

亦稚貝塚は、杵形岬の根元にある標高5～6mの砂洲上に立地している。現在、一帯は市街地化されており、遺跡の中心部には宗谷バスターミナルが所在する。亦稚貝塚の名が学界に知られるきっかけとなったのは、1901（明治34）年に坪井正五郎により紹介された海獣牙製の人形による。1950（昭和25）年に大川清により実施された調査は、現バスターミナルの敷地内に2箇所トレンチが設定され、炉址やブタが発見されている。1977（昭和52）年には、岡田淳子・西谷榮治らにより本格的な調査が行われ、海獣線刻土器やトナカイ角彫刻品などオホーツク文化期の貴重な資料が発掘されている。今回の調査目的は、遺跡の広がりや性格を確認するため、2018（平成30）年5月12日に実施し、柳澤清一・岩城克洋（礼文・利尻島遺跡調査の会）と佐藤雅彦・富岡森理（利尻町立博物館）、山谷文人（利

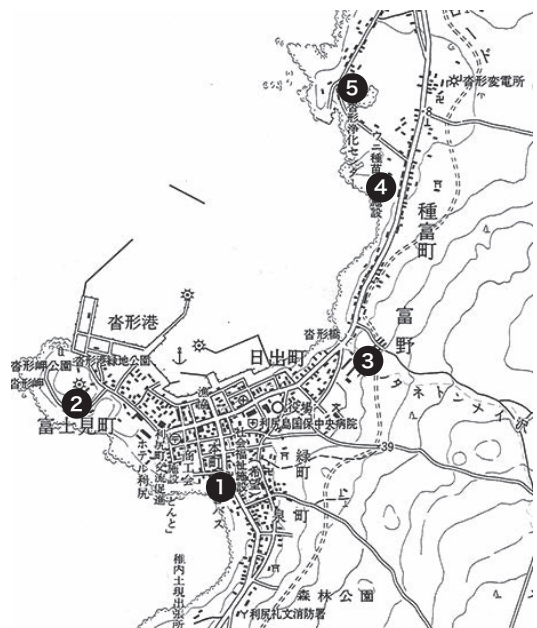


図1. 亦稚貝塚と周辺遺跡の位置。1、亦稚貝塚；2、杵形洞穴遺跡；3、日の出遺跡；4、種屯内遺跡；5、種富原野遺跡。

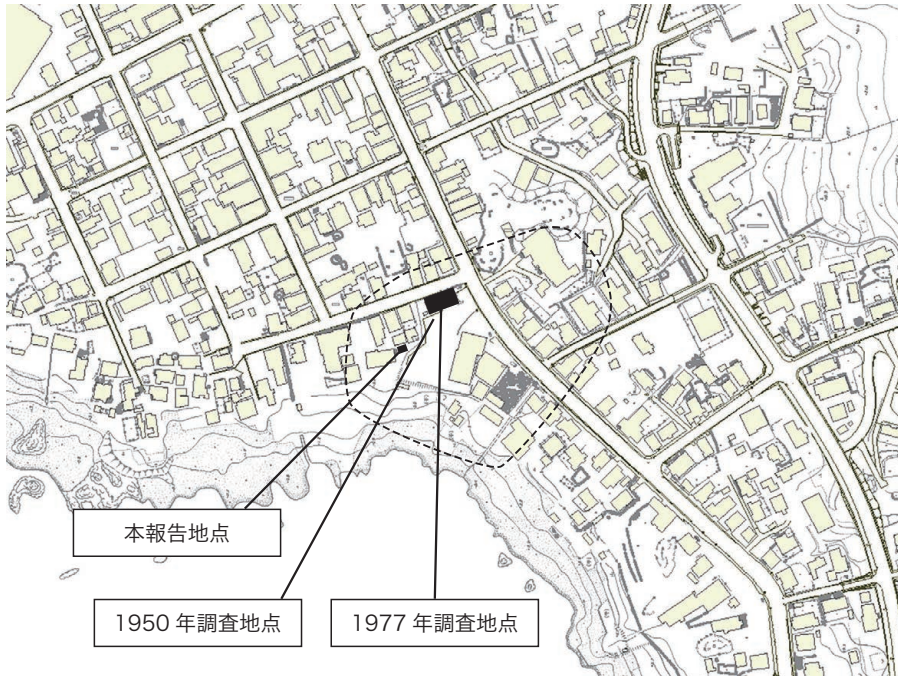


図2. 亦稚貝塚（2018年調査地点）の位置。

尻富士町教育委員会）が参加した。調査については、土地所有者の大島邦雄氏に了承を得て、試掘を行なった。

### 1. 試掘地点とトレンチの設定

宗谷バスの杓形バスターミナルは道道108号から台地の傾斜面まで、海側へ向かって広く造成されている。亦稚貝塚の大部分はターミナルと市街地に被覆されており、試掘可能と思われる地点はごく限られている。数箇所の有望な地点のうち、地主の了解が得られた場所は、ターミナルの事務所・待合室裏手から海へ向かう路地先に位置しており、民家と倉庫に相對した平坦地である（図2・写真1）。

調査を始めるにあたり、バスターミナルの擁壁角を目印として、そこからごく近接したところに1×2mの試掘トレンチを設定した。地表約60cmの深さで、オホーツク文化期の貝層・包含層を確認した。なお文化層の堆積が予想されたが、試掘の目的は達せられたので掘削を停止し、埋め戻して調査を終了した。

図に示したように、この場所は大川清の調査地点

（1950年）や利尻町教育委員会の調査地点（1977年）に比べると、かなり海側に接近した位置にある。バスターミナルの造成以前に大川が作成した貝塚の分布図（大川，1998）によると、ほぼ縁辺部に相当しているようであり、海側に向かって緩やかに傾斜する文化層の堆積状況ともよく一致している。

### 2. 土層堆積の状況

掘削停止面に至るまで、表土から6層にわたる堆積層が検出された（図3）。各層の特徴は以下のとおり観察された。

第1層（US1）：表土層（層厚5～15cm）。砂利を多く含み、締り強。近現代遺物をかなり含む。平坦に整地されている。

第2層（US2）：アワビ殻層（層厚5～15cm）。ほぼ純粋にアワビ類の貝殻で構成される貝層で、各種の近現代遺物を多量に含む。大島邦雄氏のお話によると、これらは昔の干しアワビ加工に伴う貝殻を均したものであるという。

第3層（US3）：攪乱層（層厚15～30cm以上）。茶褐色の粘土質土層で近現代遺物や玉石など相当量

を含む。直径 30cm 前後の大石が本層の下部に散在しており掘削の妨げとなった。東壁から西壁に向かって強く傾斜堆積する状況が見られる。

第 4 層 (US4)：アワビ破碎貝層 (層厚 1～

5cm)。細かく破碎されたアワビ類を主体とする貝層。東壁から西壁に向かって傾斜堆積するが、近現代期層 (US3) の影響を受けており、攪乱によって各壁において明瞭に連続しない。断面では痕跡的に



写真 1. 試掘地点から杓形バスターミナルを望む。



写真 2. 試掘トレンチ第 2 層 (US2：アワビ面) 検出状況。

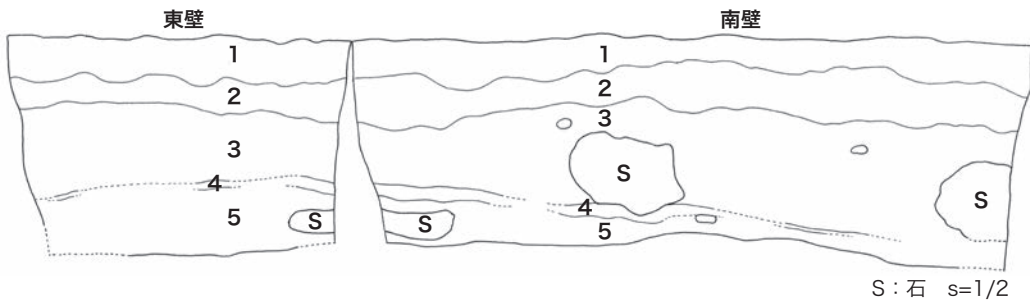


図 3. 試掘トレンチの土層堆積状況 (模式図)。



写真3. 試掘トレンチの土層堆積状況（北壁）.

見られる箇所が多い。保存状態の良い箇所では、斑状のアワビ面（南壁、北壁）を呈する。オホーツク文化期の遺物を包含しており、若干の近現代遺物を伴う。

第5層（US5）：黒褐色粘土質土層（層厚5～20cm）。US4に比べ大きな石は少ない。破碎されたアワビ類を僅かに伴う。近現代遺物は検出されていないが、東壁・西壁・北壁において、第4層（US4）の攪乱に伴う影響を受けていると観察される。遺物はオホーツク文化期のみが、やや散漫な出土状態を示す。

第6層：発掘停止面に相当する。明褐色粘土（シルト）質層で東壁から西壁に向かってやや段状に傾斜している。水分を多く含み、遺物の有無は不明であるが、地山には達していないと推測される。

### 3. 出土遺物について

#### 1) 近現代の遺物

表土（US1）から第4層（US4）にかけて、表1に示したように、多くの近現代遺物が出土した。目立つ品目としては、「目薬瓶」「ビール瓶」などガラス製の容器類、漁具の「浮き球」、陶磁器類、各種の鉄製品やガラス類などが挙げられる。多量のアワ

ビ類が面状に厚く集積されていた第2層（US2）において、最も多量の近現代遺物が伴出している。鉄製のヤスを用いたアワビ漁やその他の漁法に関連する浮き球や大型の釣り針などの使用が推測される。各種のガラス容器類と浮き球、陶磁器類、スレート・針金などは、第1～3層（US1～US3）に共通するものが多く見られる。なお、干しアワビの加工場が昭和30～40年代まで稼働していたと伝えられている。その前後の時期に各種の近現代遺物とアワビ類などが現ターミナル周辺へ運搬、または投棄され、その後に砂利を入れた整地作業が行われ、宅地化したと推定される。写真4に示した3点は、年代推定の手掛かりを有するものである。1例は参天堂の目薬瓶「大学目薬」である。背面には「参天堂薬房」とある。

製薬株式会社としての参天堂株式会社の設立は1925（大正14）年であり、1例のような瓶型から両口の点眼瓶への製品移行は、1932（昭和7）年以後とされている。1例の年代は、これにより昭和一桁代と推定される。次に2例のビール瓶（底部）である。人為的に打ち欠いたような断面を残しており、「D?・・・PPON BREWERY Co. L・・・」と側面に記され、底面には「☆」マークが付けられ

表 1. 近現代遺物の種別統計

	第 1 層 (US 1)	第 2 層 (US 2)	第 3 層 (US 3)	第 4 層 (US 4)
ビン類・浮き球	13	30	20	
ガラス	2	3	5	
おはじき	1			
プラスチック	1	1		
磁器	5	24	2	
陶器	1	12		
碇子		1		
スレート	1	1		
釘	1	8		
釣り針	2			
鉄製漁具				1
針金		1	1	
鉄片	8		2	
乾電池		1		
石炭				1
小計	35	82	30	2

ている。本ビール瓶は戦前から戦後にかけて営業していた「大日本麦酒株式会社」(1906 (明治 39) 年に合併) のものであり、戦後 1949 (昭和 24) 年に「朝日麦酒」と「日本麦酒」に分割されるまで、DAINIPPON BREWERY Co. Ltd としてのビールが生産されている。したがって 2 例それぞれ自体の年代は、ほぼ明治末期から昭和 20 年代前半までに位置すると推定される。3 例の碇子は短期間の年代を示すものでない。形状としては「昭和期」の標本例に酷似しており、ビール瓶の年代を参照すると、昭和初年から 24 年までの範囲に収まると推測され

る。表土から第 3 層 (US1 ~ US3) の近現代遺物の年代は、以上の 3 点をもとに想定すると、ほぼ昭和元年から 25 年までの範囲に集中している可能性が高いと思われる。その直下の第 4・5 層 (US4・US5) でも、ごく僅かながら近現代遺物の混交が見られる。内容的には単純に「オホーツク文化」期の包含層として認められ、中世から近世・近代初期の土層堆積は欠落している。したがって平安期に比定される文化層の上に近現代の遺物層が直接に累積しているという堆積状況が認められる。これと類似した状況は、礼文島でも香深井 1 遺跡や香深井 5 遺跡、香深井 6 遺跡、元地遺跡などで観察されており、いずれも貼付文土器期の安定した文化層の堆積が欠落している。それにはどのような自然・人文史上の要因が作用しているのか。その点は今後検討を要する課題となろう。

2) US2 出土のアワビ類について

大量のアワビ類は精査してみないと分からないが、大半はエゾアワビに属する。多くは破碎されていたが、完形もしくはほぼ完形のものも数多く出土した。殻長はだまかに分けると 4 ~ 5cm 以下、8cm 前後、10 ~ 11cm、12cm 大の 4 類が区別される。これら的大半には、捕獲するために用いられた漁具 (各種ヤス類) の刺痕が残されている。

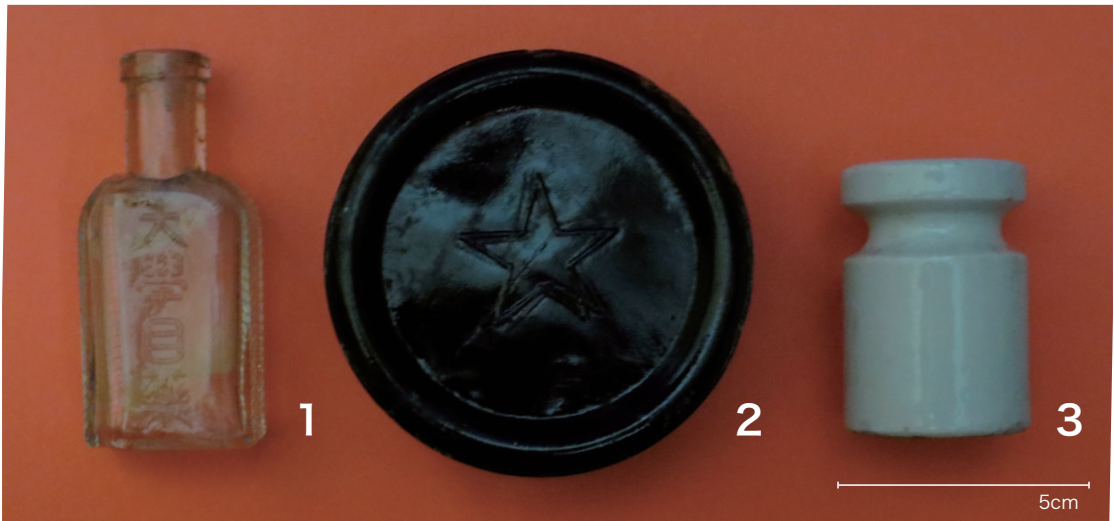


写真 4. 試掘トレンチ出土の近現代遺物。1, 目薬瓶; 2, ビール瓶; 3, 碇子。

4cm大では刺痕は見られない。8cm大では1孔が3点、2孔が2点あり、孔径は3～5×4～7mmを測る。10cm大では1孔が3点、2孔も3点あり、孔径は3～6×5～8mmを測る。12cm大では1孔が1点、2孔が3点あり、孔径は3～5×3～10mmを測る。また刺痕の幅は2～3cmの範囲にほぼ収まる。近現代の遺物にヤス類が含まれていないため、この刺痕との関係性を検討できないが、昭和前期のヤス類が残されていれば、近現代アワビ漁の技術的な側面について、何か分かる点があるかも知れない。

### 3) オホーツク文化期の遺物

小規模の試掘トレンチであるが、第4層(US4)と第5層(US5)から相当量の遺物が出土した。量的には土器類が目立ち、少量の骨角器やその未成品、石器類が見られる。動物遺存体は、近現代の第2・3層でも検出されているが、第4層以下では、アワビ類を主体とし、若干量の骨片が採集されたに止まる。

#### 土器類

土層堆積図(図3)が示すとおり、オホーツク文化期の土器類は第4層と第5層において上下に分かれる。内容的にも若干の混在資料を除くと、第5層の方が古い様相を示し、第4層はそれより新しいものである。両者は層位が示すとおり、連続的に変遷していると観察される。以下、個々の資料の所見について簡略に記載する。

#### 第4層(US4)

本層では29点の資料を掲載した。有文・無文土器を網羅し、刻文を有する小片を未掲載としている。1～5例は古い時期の土器片である。1例は鈴谷式、2～5例は刻文土器である。6～29例が本層の主体を占める。大きく4類に分けられる(図4～6)。

第1類(6・8・17・19～24, 28): 香深井1遺跡において一般的に見られる刻文・沈線土器(沈線土器)に属するもの。6例は口唇部に凹線が施

される。やや肥厚した口縁部に二段の刺突文を加える。焼成はきわめて良好。8例は瓢箪形の器種に属する。口唇部は平坦に作出され、口端下に4条の沈線が波打つように施される。17・19～21は摩擦式浮文を有する。口端部の形態、装飾の有無や要素に違いが見られる。28例は以上に伴う底部と推定される。

第2類(7・9～16, 23): 香深井1遺跡では稀であり、沼浦海水浴場遺跡の第2～4次調査で纏まって検出されたもの。7・9例の器形は壺形を呈するが、類例に乏しい。9例の平行沈線は8例に似る。7例の方が古く、9例は8例に近い時期かと思われる。10～16例も既存資料には見当たらない。14・15例にあるレリーフ状の稜線は、香深井1遺跡の「魚骨層I」において最も盛行するものである。ただし14例のような文様構成、器形のものも存在しない。15例とともに折衷的な土器かと思われる。10例では、口端部の粘土が迫り出しており、その下に稚拙な梯子状文が施されている。11・12例は、平行線内に刻文や刺突文を間欠的に施すもの。13例は、胴部にレリーフ状の大鋸歯状文を描き、その下に沈線を引く。これらも香深井1遺跡には見当たらない。初出例かと思われる。23例は浅鉢形の土器である。香深井1遺跡の魚骨層Iから石積み以降までに類例は見当たらない。口縁部下に中太な沈線が施される。仮に本類としておく。

第3類(25～27): 香深井5遺跡において大量に出土した元地式の新しい時期に比定されるもの。器厚は6～9mmで中厚手に属する。胎土・焼成・調整からみて元地式に比定される。本類は近現代遺物層の直下において第1・2類と伴出しており、沼浦海水浴場遺跡の調査所見によると、同時代である可能性が高い。

第4類(29): 本例は薄手の作りで、胎土は擦文土器に似ているが、砂粒を含んでおりやや異なる。焼成もやや甘く、器面の調整も丁寧ではない。裏面には浅い凹凸が見られる。文様は平行線内に小鋸歯状文を施し、その上にやや雑な斜線文を加えている。こうした文様構成の資料は香深井1遺跡に見当たらない。おそらく2類に伴うものであり、擦

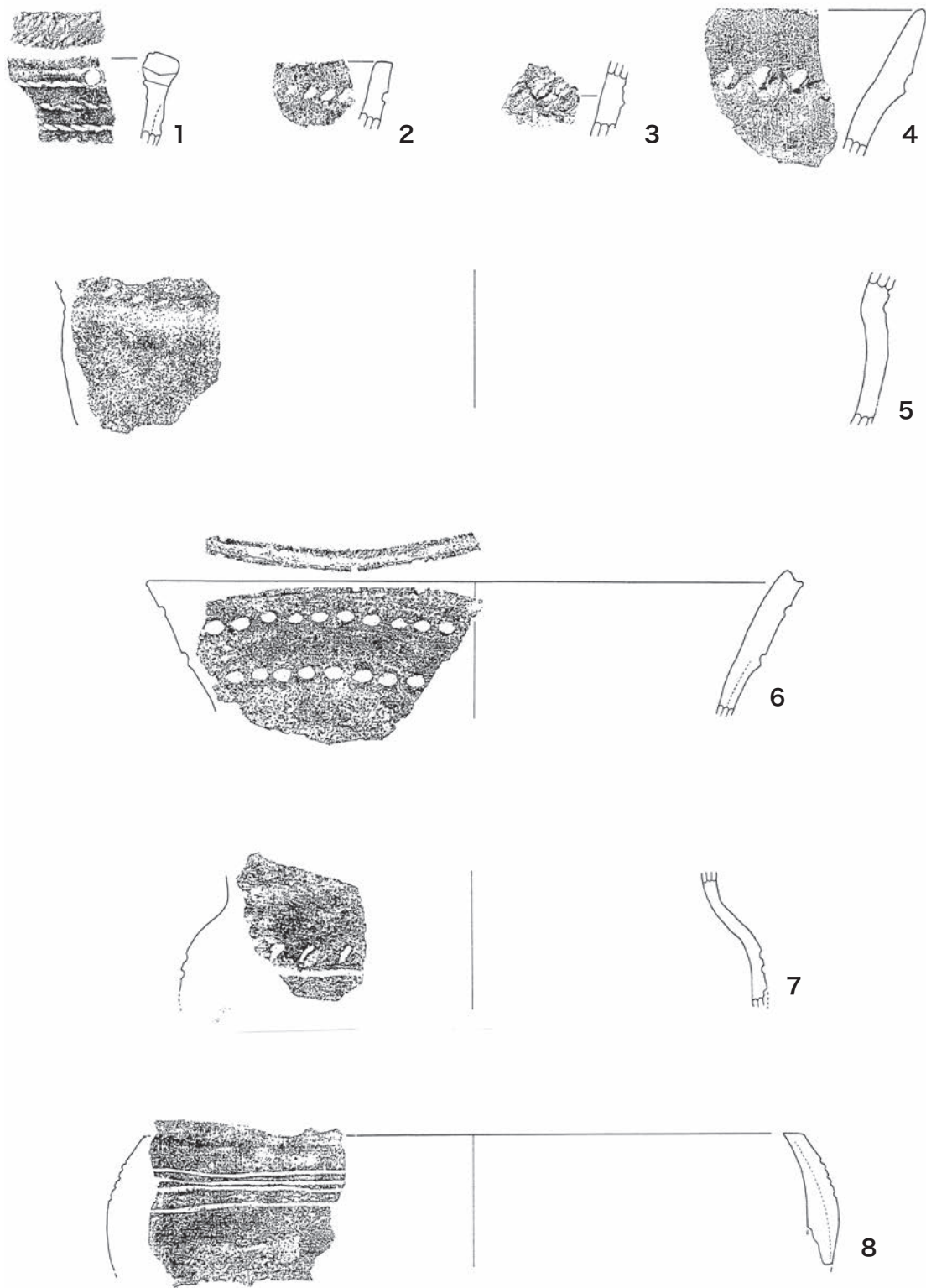


図4. 試掘トレンチ出土の土器 (1).

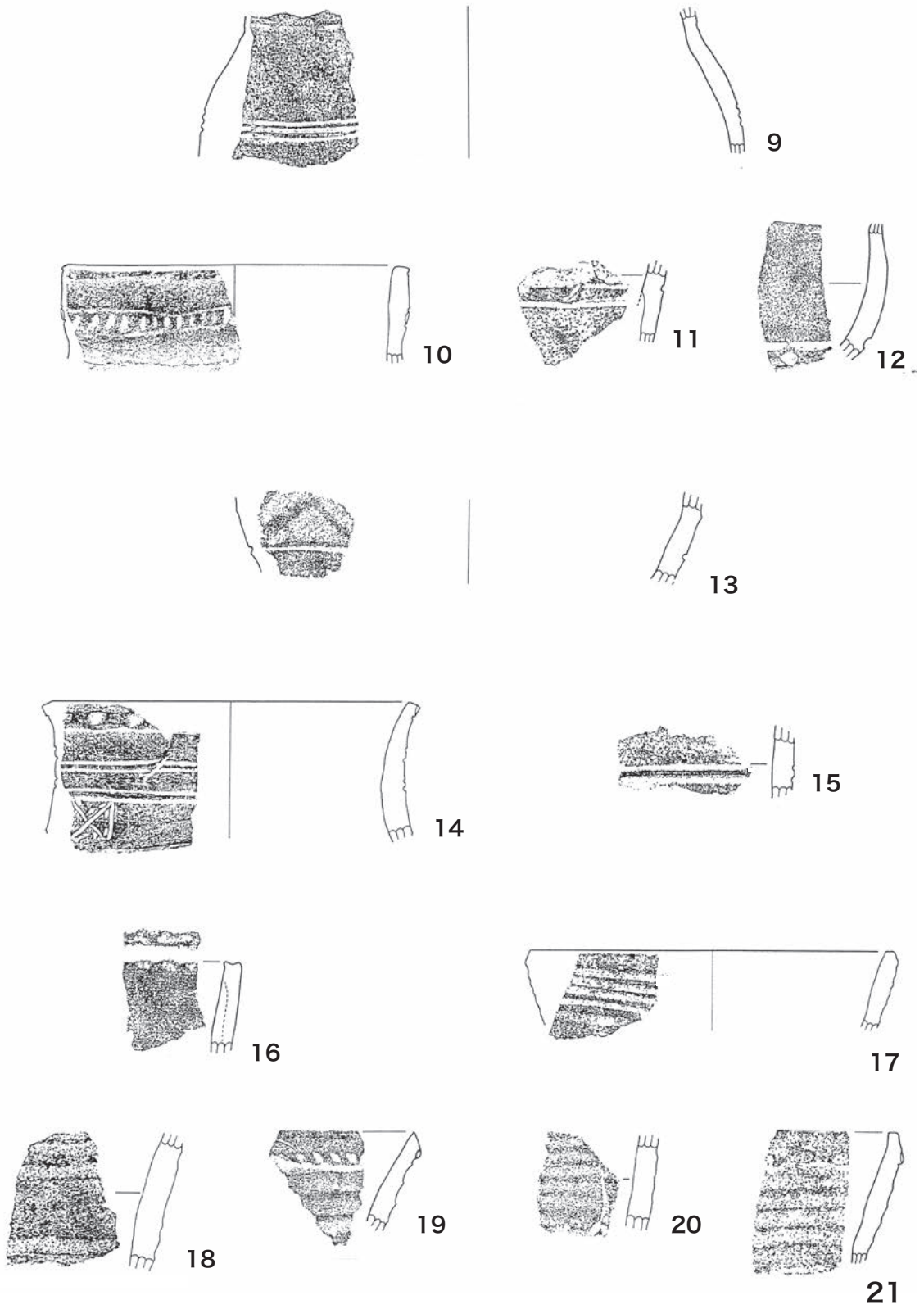


図5. 試掘トレンチ出土の土器(2).



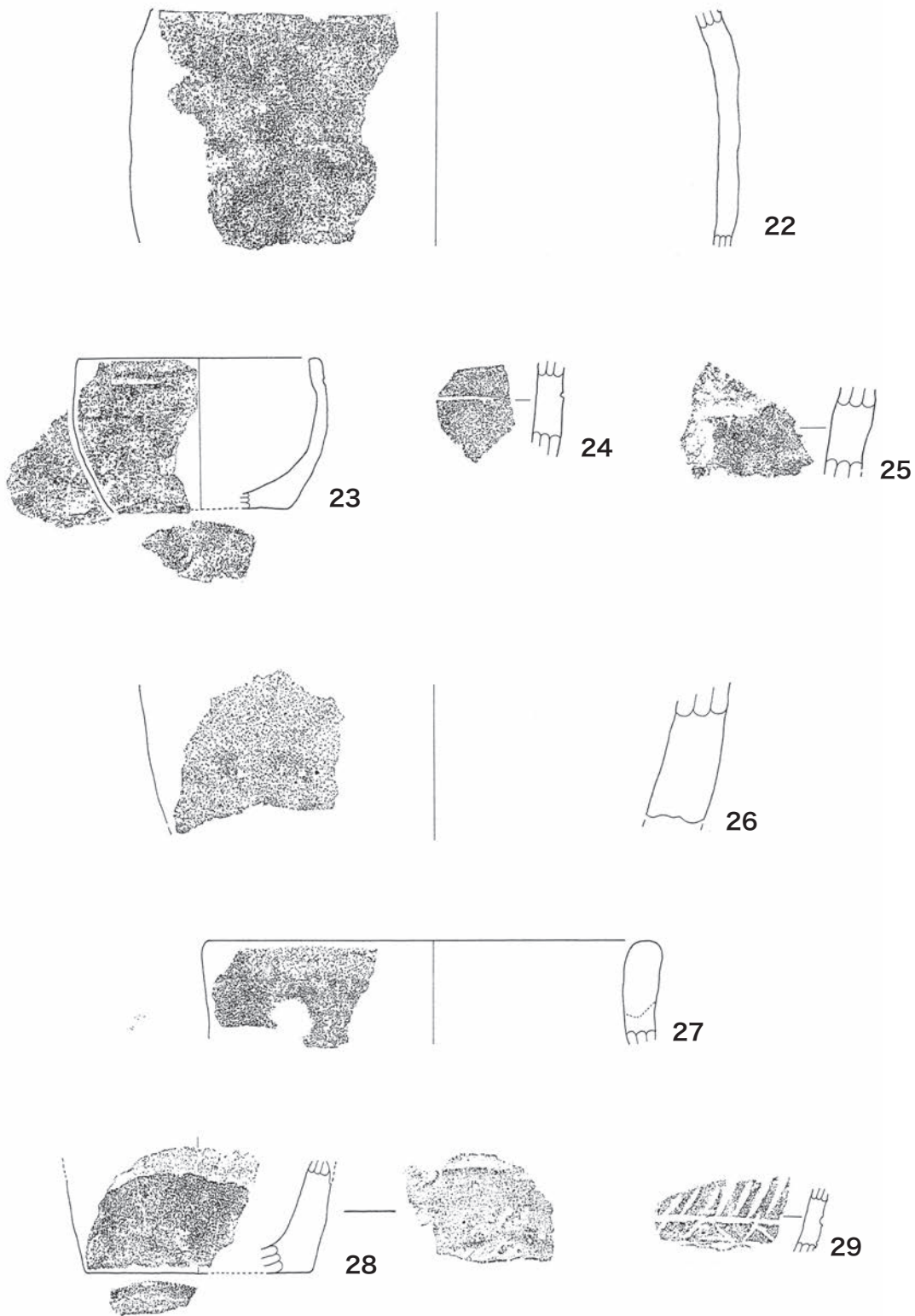


図6. 試掘トレンチ出土の土器 (3).

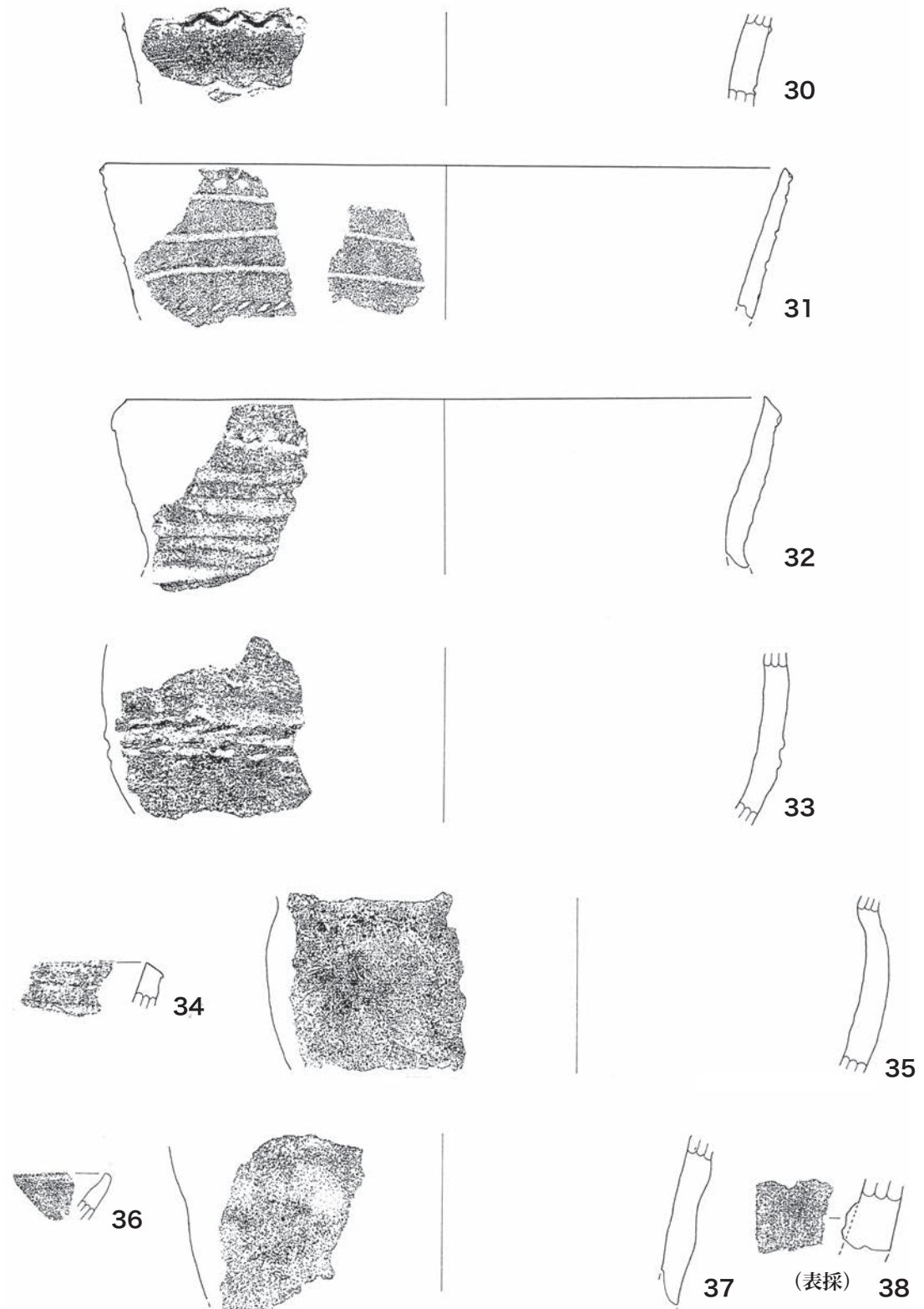


図7. 試掘トレンチ出土の土器 (4).

文土器系かと思われる斜刻線文を取り入れた折衷的な一例かと推測される。

以上のうち 8 例と 9 例, 13 例は, その他に比べるとやや新しい時期に属するように思われる。

#### 第 5 層 (US5) (図 7)

本層では 8 点の資料を示した。無文の口縁部 (1 点)・胴部 (2 点), 有文小片 (1 点) を未掲載としている。系統差・時期差によって 4 類に分けられる。

第 1 類 (30): 本例のみ 1 点が出土した。第 4 層の 1～5 例とともに, 何らかの事情で混在したと推測される。剥脱部分があるが, 捻りを加えた断面が棒状になる貼付文 2 条を施している。施文した際の圧痕が明瞭に残る。

第 2 類 (31・32・34, 35・37): 本類が第 5 層の主体を占める土器である。31・32・34・35 例は香深井 1 遺跡に見られる。表面に凹凸が見られる。37 例は沼浦海水浴場遺跡でも出土している。

第 3 類 (33): 本例は胴部片であるが, 正しくは逆位かも知れない。指先でつまみ上げるようにして爪形文帯を二段に構成している。爪形文間は波状の稜線を呈する。こうした施文手法は「東多来加式」(伊東, 1942) に認められ, 佐藤達夫が夙に編年上の手掛かりとして注意を喚起している (佐藤, 1964, 1972)。

第 4 類(36): 器厚 2～3mm を測る口縁部片である。表裏とも丁寧調整されており, 坏の可能性が高い。

#### 表面採集の資料 (図 7)

38 例は中厚手の元地式である。器厚 6～7mm を測る。丁寧に調整され, 堅致に焼成されている。内面は顕著に膨らみ溶融しており, 気泡が見られる。元地式の溶融土器片は初見ではなかろうか。焼成・調整の具合からみて, 第 1 類の 8 例や第 2 類の 9 例に伴うものと推測される。

#### 骨角器類 (図 8)

骨角器類は, 7 点出土しており, いずれもオホーツク文化期の所産と考えられる。骨斧は, 刃部が 4 分の一と柄部が欠損している。鯨骨製であろう。垂飾品については, 長さ 3.8cm, 直径 0.4cm を測る細い管状の製品で, 表面を交互に縞模様になるよう丁寧に削り出している。垂飾品としたが, 細い針状の道具を差し込んだ柄の部分とも考えられ, 用途については検討を要する。いずれも出土層位は第 4 層 (US4) である。未成品については, 5 点出土している。そのうち, 長さ 10.5cm を測る鯨骨製のヤスの未成品のほか, 鳥管骨製の針入れの未成品と思われる 2 点については, 第 4 層 (US4) からの出土である。ほか 3 点については第 5 層 (US5) からの出土で, 被熱した鯨骨製のものと海獣骨製のものそれぞれ切断痕が認められる。鳥骨を利用した針状の未成品も出土している。

#### 石器類 (図 9)

石器は, 2 点出土している。いずれも第 4 層 (US4) 出土で, オホーツク文化期の所産と考えられる。磨製石斧は, 長さ 10.3cm を測る。2 分の 1 ほど欠損しているが, 割れた側面に細かな擦痕が認められることから, 敲き石用途で再利用したものと思われる。石質は, 硬質頁岩と考えられる。有孔石錘は, 上部の吊り手部分のみ残存している。両方向から穿孔しており, 安山岩製と考えられる。

### 4. 動物遺存体について

本試掘によって得られた動物遺体は, 調査面積が狭い(1×2m)こともあり, 出土量は概して少ない(表 2)。資料の少なから, 当時の動物利用について明らかにできることは限られるが, 以下, 上層から順に出土遺体の概要について述べることとする。

表採 (US0) された資料としては, 中柄などに類する棒状骨製品の破片が得られている。海獣類骨を素材としたものである。

アワビ殻が層状になって多量に検出された, 近現代を中心とする第 2 層 (US2) では, サンプル (容



図8. 試掘トレンチ出土の骨角器・未成品(左;第5層(US5)出土,右;第4層(US4)出土).

量1リットル)の採集と目についた資料の採集が併行して行われた。サンプルではアワビ殻がほとんどを占めたが、これは前述されている通り、かつてこの付近にあった干しアワビの加工場に伴うものであろう。この他に同層からは、ガラス片等が少量出土した。手採集では、イヌの出土が目立った。出土部位は大腿骨と脛骨、中足骨であり、いずれも後肢を構成する部位である。大腿骨をもとに関節の癒合状況や大きさについて観察した結果、少なくとも3個体が含まれていることが分かる。このような後肢の集中が何故起こったのか、興味が惹かれる。これらのイヌは、全身の骨が揃っていないことや、大腿骨と脛骨の各1点には人によってつけられたとみ

られる傷も確認できたことから、解体された可能性が高く、死後にイヌが食料や素材として利用されたことをうかがわせる。前代のオホーツク文化期に利尻島や礼文島ではイヌがよく食べられていたことが知られているが(大場・大井, 1981; 山谷ほか, 2011), それ以降のイヌ利用については、資料の少なさから不明な部分が多い。本資料は、その課題に取り組むための重要な資料となる。同一個体とみられる中足骨(第2~第4)はいずれも完形で関節が癒合していたため、計測を行った。第2中足骨から順に全長は65.2, 73.1, 75.0, 67.9mmであり、この値を体高推定式(西中川ほか, 2008)にあてはめると、推定体高はそれぞれ50.7, 51.2,

51.0, 52.0cm となり、体高 50cm を超える比較的大きな個体だったことが分かる。また、同層では、ヒグマの第 3 中手骨の近位部が出土している。ヒグマは通常利尻島内に生息せず、稀に海を渡ってくる個体がいる程度であるため、人によって周辺地域から持ち込まれた可能性も考える必要がある。

第 3 層 (US3) では、ミズナギドリ科の尺骨と哺乳類の椎骨破片が確認できた。前者はハシボソミズナギドリと同程度の大きさであった。

オホーツク文化期を中心とする第 4 層 (US4) では、魚類が一定程度見られた。確認できた魚種は、タラ科、フサカサゴ科、アイナメ科など、利尻島周辺に多く生息する魚種である。しかし、手採集では目につく比較的大きな資料のみが取り上げられ、小型の魚種や部位は見落とされることが多い。事実、今回採集された魚類遺体のほとんどはサイズの大きな資料であり、本遺跡で 1977 年に行われた調査で主体種

であったニシン (岡田ほか, 1978) のような小型の骨を持つ魚種は確認されていない。このように、当時の漁労について復元するためには、サンプル採集の実施が不可欠であることは言うまでもない。この他、哺乳類ではイヌの下顎骨と脛骨が確認された。下顎骨は永久歯に生え替わった成獣であったが、脛骨は幼獣である。さらにヒグマとみられる橈骨とブタの遊離歯 (下顎第 1 後臼歯) も見つかった。利尻島はオホーツク文化期にイヌとともにブタが盛んに利用された地域であり (岡田ほか, 1978; 山谷ほか, 2011)、今回の出土資料からもイヌとブタの 2 種類の家畜が飼育されていたことが分かる。また、本層では、近現代を中心とする層には含まれなかった海獣類骨が少量ではあるが確認された点が注目される。オットセイの大腿骨は近位部・遠位部ともに関節が未癒合ながら大きく成長した個体で、雄である。1977 年の調査で出土したオットセイの主体も成獣の雄だったため (岡

磨製石斧



石錘 (半欠)

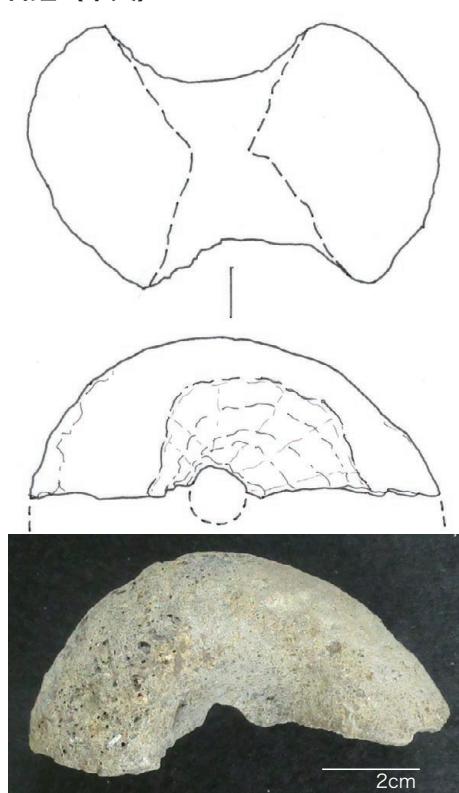


図 9. 試掘トレンチ出土の石器類。

田ほか, 1978), 当時, 雄の成獣が周辺海域に多く出現したのか, もしくはオットセイのなかでも大型の個体を意図的に狙った結果とも考えられる。いずれにせよ, 日本海域へのオットセイの回遊特性 (和田・伊

藤, 1999) からすれば, オットセイの捕獲時期は索餌のため繁殖地から南下回遊してくる冬期であったとみられる。加えて, 破片ではあるが, クジラ目の大型の椎骨も確認されている。クジラ目については, 意図

表2. 動物遺体ほかの出土内容

	US0	US2		US3	US4	US5	
	手採集	1L サンプル	手採集	手採集	手採集	手採集	
貝類	エゾアワビ						
	ホタテガイ		27			fr 1	
	イガイ					fr 2 fr 1	
魚類	ネズミザメ科					椎骨 1	
	タラ科					主上顎骨 L 1 角骨 L 1 R 1 椎骨 6	
	フサカサゴ科			擬鎖骨 R 1		前鰓蓋骨 L 1 R? 1+fr 椎骨 5	
	アイナメ科					歯骨 L 1 主鰓蓋骨 R 1 椎骨 2	
	カジカ科					前鰓蓋骨 L 2 R 1	
	ヒラメ? 種不明魚類			fr		椎骨 2	
鳥類	ミズナギドリ科				尺骨 L p-m 1		
	種不明鳥類					四肢骨 m 1 fr 3	
哺乳類	イヌ			大腿骨 L m-d 1 成 ** 大腿骨 L d 1 若 ① 大腿骨 L d 関節 1 ① 大腿骨 R 1 若 脛骨 L p-m 1 若 ② ** 脛骨 L p 関節 1 ② 脛骨 L d 1 若 脛骨 R m-d 1 若 ②? 中足骨 II R 1 成 ③ 中足骨 III R 1 成 ③ 中足骨 IV R 1 成 ③ 中足骨 V R 1 成 ③ 中手骨 III R p 1 成			下顎骨 R (××××× P234M1 ×) 成 脛骨 L m 1 幼
	ヒグマ						
	ヒグマ?					橈骨 L p 1 若	
	ブタ					遊離歯 下顎 M I R 1	
	ブタ?					寛骨 L (座) 1 成?	
	オットセイ					大腿骨 R 1 成 ♂	
	クジラ目					椎骨 (板) fr 1	
	種不明海獣類					椎骨 (頸) fr 1 指骨 3 fr 7	
	種不明哺乳類			手足根骨 1	椎骨 fr 1	橈骨 m 1 肋骨 fr 5 fr 14 (3*)	
	その他	棒状骨製品 fr 1	石 fr ガラス fr 鉄 fr プラスチック? 製管 1 紐 1	不明 (海獣類歯?) 1*		不明 (海獣類歯?) 2* 鉄 fr 1	

凡例 L: 左 R: 右 fr: 破片  
p: 近位部 m: 中間部 d: 遠位部  
I: 切歯 C: 犬歯 P: 前臼歯 M: 後臼歯  
成: 成獣 亜成: 亜成獣 幼: 幼獣

\*: 被熱 \*\*: 傷  
( ) 内: 内数  
○番号は同一個体であることを示す

的に捕獲したかもしれないが、座礁した個体を利用した可能性も考える必要がある。このように少量とはいえ海獣類の利用が確認できたことは、「海獣狩猟文化」との別名を持ち、海に依存した生活を営んだオホーツク文化らしい特徴といえるだろう。

第5層 (US5) の資料としては、魚類の椎骨が1点確認されただけである。人工遺物は相当量出土したというが、動物遺体は少ないため、本層形成時の動物利用の状況は不明である。

### まとめ

今回の調査は、実に40年ぶりである。小面積の調査であったが、遺物はそれ相応に富んだものが出土した。本報告地点は、これまで調査された地点より海寄りで、今回の調査によって包含層が残存していることが確認された。周辺にも同様な層や遺構が残されている可能性が強いと思われる。現バスターミナルも盛り土しているため、舗装下の遺存状況にも期待できよう。また、さらに低地を調査することで、木製品などの遺存も有り得る。

出土した遺物は、昭和前期を主体とする近現代遺物類と、オホーツク文化期の二者に分かれる。前者については、これまでに報告された比較資料に乏しいため、現時点で必要と思われるデータを、ごく簡略に示すに留めた。今後、島嶼域で出土した既存遺物の再整理が進めば、「アイヌ文化期」とされる「アワビ層」との繋がりについて、より具体的な検討が行えるようになるであろう。

オホーツク文化期では、刻文土器に後続する古手の土器群が層位的に検出され、また、それに伴う若干の骨角器・未成品や磨製石斧・有孔石錘が発見された。時期的には混在例を除くと纏まりのよい資料であり、利尻・礼文島における土器類の系統弁別や編年を見直すうえで、沼浦海水浴場遺跡とともに格好の比較資料になるとと思われる。

骨角器のうち、特に鳥骨を加工した垂飾品が注目される。香深井1遺跡では、「ミズナギドリ」の尺骨を用いた装飾的な製品(3点)が発見されている。亦稚貝塚の資料は加工された両端が残っており、それらとは異なるようである。アムール川中流域で

は、本例と形状の似た管状の青銅製品が報告されている。それらが本例と系統的に繋がるとすれば、道北の島嶼域・オホーツク海沿岸域における初出例として注目されよう。

動物利用のうち、オホーツク文化期については、少ない出土資料ながら、これまで利尻島で確認されてきた内容と類似した動物利用が行われていたことが推測された。具体的には漁労と海獣狩猟、イヌとブタの飼育を核とした生業体系である。近現代については、より詳細な所属時期の特定ができない限り検討は難しいが、今回後肢がまとまって出土したイヌについて、オホーツク文化期の終焉後も島内で食用としての利用が続いていたのかを知るための興味深い資料となった。今後の資料増加を待ちたい。

なお本遺跡の拡がりや年代的な構造を明確にするために、今後も試掘調査の継続的な実施が望まれる。

本報告の執筆分担は、山谷(はじめに、骨角器、石器)、内山(動物遺存体)、柳澤(上記以外、監修)、まとめについては、三者で協議の上執筆した。

### 参考文献 (五十音順)

- 伊東信雄, 1942. 樺太先史時代土器編年試論, 喜田博士追悼記念国史論集: 19-44, 大東書館.
- 大場利夫・大井晴男編, 1976. 香深井遺跡(上). 東京大学出版会. 774pp, 134 pls.
- 大場利夫・大井晴男編, 1981. 香深井遺跡(下). 東京大学出版会. 727pp, 58 pls.
- 大川清, 1998. 北海二島: 禮文・利尻島の考古資料(手控・拓図). 窯業史博物館. 69+61pp.
- 岡田淳子・西谷榮治・梶田光明, 1978. 亦稚貝塚. 利尻町教育委員会. 141pp.
- 佐藤達夫, 1964. オホーツク遺物の特色. 駒井和愛編, オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡(下, 別篇): 78-88. 東京大学文学部.
- 佐藤達夫, 1972. 擦紋土器の変遷について. 東京大学文学部考古学研究室編, 常呂: 462-487. 東京大学文学部.
- Деревянко, Е. И., 1977. Троицкий могильник, Новосибирск. С. 3-223 pp.

- 西中川駿・福島晶・谷山敦ほか，2008. イヌの骨計測値から骨長ならびに体高の推定法. 動物考古学, 25: 1-11.
- 山谷文人・内山幸子・江田真毅ほか，2011. 利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書Ⅱ. 304pp.
- 柳澤清一，2017. 礼文・利尻島編年の新検討ーその(1) 香深井5遺跡を中心としてー. 利尻研究, (36): 47-71.
- 柳澤清一，2018. 礼文・利尻島編年の新検討ーその(2) 亦稚貝塚資料から(1). 利尻研究, (37): 57-82.
- 柳澤清一，2019. 礼文・利尻島編年の新検討ーその(3) 亦稚貝塚から沼浦海水浴場遺跡へー. 利尻研究, (38): 67-80.
- 礼文・利尻島遺跡調査の会，2017. 北海道利尻富士町沼浦海水浴場遺跡第一次発掘調査報告書. 151pp.
- 礼文・利尻島遺跡調査の会，2018. 北海道利尻富士町沼浦海水浴場遺跡(第2次)・沼浦遺跡(第1次)発掘調査報告書. 200pp.
- 和田一雄・伊藤徹魯，1999. オットセイの回遊. 鰭脚類: 121-147. 東京大学出版会. 東京.